



双塔

カトリック新潟教会

2015年9月
No. 328

歴史から学ぶ(三)

— 自分のため、人のため —

主任司祭 ラウール・バラデス

この間テレビのインタビューの中で、ある有名な僧侶が禅について様々な側面から人生について話をしていました。『「人の為と書いて『偽』という字になる』とちらっと言いました。そして次のような解説を付け加えました。『「人のために」何かをしようと思う時に、先ず、「自分のため」でないと長く続けられない。逆に、他のことを考えず、自分のために楽しく、精一杯行動するならばそのうちにそれは人のためになる』と。

僧侶の話を半分しか聞いていなかった私は、ウルバン・フォリー神父(Urbain Jean Faurie 1847-1913)のことを思い起こしました。

フォリー神父は南フランスの小さな村、農家の家に生まれました。母親は信心深い人で12人子供を育てました。第7子だったウルバンを小神学校に出しました。しかし、病気のため退学して、18才のときに再入学しました。1873年に叙階を受けて間もなく来日し、明治6年に新潟教会の叙任司祭になりました。神学生時代から日本に憧れて、日本への派遣を知ったその時の手紙は感謝と喜びに溢れています。

期待と夢でいっぱい27才の若さで新潟に到着しました。ところが彼が望んでいた福音宣教活動は殆ど出来ませんでした。もっといい時期を待ちながら主任司祭のエヴラル師とともに日本語の学習に力を入れていました。しかし、エヴラル師と違ってフォリー師はじっとしていられなかった。農家生まれのせいなのか、個人の性格なのか分かりませんが遊歩するのが本人の楽しみでした。二人は当時、古町通り7番町、本明寺境内の平屋に住んでいました。エヴラル師は勉強にのめり込んでいて、フォリー師は住まいの裏にあった砂丘に出かけて悲嘆のどん底にあってよく涙を流していたと同級生のウット神父は証言を残してくれました。

明治7年の春から夏の間は、フォリー神父の人生を変えた恵みのときでした。「自分のために何か出来なければ人のために何も出来なくなる」とこの悩みの中に自分の道を見つけました。フランスの植物学者からの依頼に応じて、動植物を採集し始めました。当時、外国人は自由に出来る事が出来なくて、決められた地域から出るときには毎回許可をもらわなければなりません。フォリー師は学術研究の名目で新発田、五泉、村松、三条に出かけて福音宣教活動しながら植物採集していました。数年後、彼が集めた植物はフランスの依頼者の本に紹介されました。彼が発見した植物の新種は約700種以上といわれ、そのうち約70種に神父の名前が学名として使われています。海外でもフォリー師がフランスに送った植物は彼の名前で知られています。例えば、白山石楠花はフランスの学名は Rhododendron Faurie です。

植物採集をしながら今の新発田地区に伝道を続けた中、明治9年6月15日に新発田・地蔵堂町の佐藤栄太郎(29才)に洗礼を受けることができました。植物採集のついでなのか宣教師としての本職なのか、分かりません。そしてフォリー師がその区別をしていたかどうか、それを知るすべはありません。佐藤栄太郎はフォリー神父の初の受洗者で、新潟教会の洗礼台帳に3番号として記されています。神父の気持ちはどうであれ、この事実は変わりません。

周囲の人にとってフォリー神父の植物採集は単なるうつ病予防、中途半端な趣味のようなものに過ぎなかったかも知れません。しかし楽しく、長くやってきたことは植物学のため、教会のため、そして洗礼を受けた方のためにもなりました。「フォリー神父」に載っている山口鹿三氏の指摘がフォリー神父の気持ちを以下のようにまとめてくれています。

「動植物を採集して、自然が示す真理の探求に勤め、この宇宙には自然の法則があり、神の摂理によって導かれているということを教えようとしていた」

「人のために」と自慢して行動すれば偽りになりますが「他のことを考えず」「自分のために」「精一杯に行動する」ならば、実際には「人のため」「教会のため」「神様のため」にもなるのではないのでしょうか。

神の導きの元で楽しく、そして長く続けられるのならば。



■ 聖母被昇天ミサ・祝賀会 ---- 8月15日(土) 10:00 ----

夏休みで帰省中の若者の姿が目立つ聖堂で、菊地司教様とラウル神父様、三崎神父様の共同司式によるミサが捧げられた。司教様は「平和の道の原型がマリア様の生き方である。私たちは神が望まれる世界の実現に努めなくてはならない」と話された。この日は、司教様の霊名の祝日で、霊的花束が贈られた。また、ミサ後に、センター前にテントが張られ、お父さん、お母さん方が鉄板で野菜や焼きそばを汗だくになって焼くなか、みんなで「美味しいネ！」と舌鼓。かき氷やスイカ割りもあり、平和で過ごせることに改めて感謝した日であった。

■ サマースクール ----- 8月22(土)、23日(日) -----

新潟教会の小中学生、青年が村松教会に集まり、サマースクールを行った。地元教会の子どもも加わり、20名ほどが、バーベキューや川あそび、流しそうめんなどを楽しんだ。

最終日の午後、ラウル神父様司式のミサが行われ、神父様は二つ大事なお話をされた。「これからの人生の中で辛い時がある。その時は、この日の福音書のメッセージであるペトロの言葉を思い出していけばよいと思う。『主よ、わたしたちはだれのところへいきましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます』イエス様の話す言葉には力がある。だから、私たちはイエス様の後について行く」。もう一つは「教会の仲間は喧嘩しても仲直りできる。お互いに傷つけあっても一緒に遊べる。それは、イエス様が私たちの間におられるからである。これからも教会の仲間を大事にして、一つのパンになって、ひとつの者になって、多くの人の為に役だつ者となっていけばよい」と話された。2日間のキャンプを通じ、みんなが仲良くなった。

新しいミサ典礼書の総則による変更について —— 典礼部から ——



今年の11月29日（待降節第1主日）実施に向けて、日本カトリック司教協議会から小冊子『新しい「ローマ・ミサ典礼書の総則」に基づく変更箇所』が発行されました。（2015年6月15日）

信徒の皆様へ新しい『総則』に基づく変更箇所を知っていただくため、10月4日より9時半のミサ後、数回に渡り勉強会を開きます。時間は10分程度を予定しています。

皆様のご参加をお願いいたします。

